

大館 曲げわっぱ

活性化事業」と連携し、伝統的な工芸品に関わる伝統工芸士などの職人を、小・中・高等学校などへ派遣する事業の中の一つとなっています。

経済成長が進み、利便性や効率性は上昇し、生活は豊かになってきました。しかし、その反面、豊かな心と潤いが、欠けて来ているのではないかとの指摘があります。こうした中で、「個性豊かな芸術文化、伝統文化」の役割が重要視されています。

そのため、児童・生徒が伝統的工芸品に慣れ親しみ、伝統工芸士などの職人に接することで、個人の感性を養うことと、歴史や文化の継承、発展に貢献することを目的に、この伝統的工芸品教育事業が実施されているそうです。



伊藤理事長(左)からお話を伺いました

曲げわっぱ作り

体験学習

釈迦内小学校で行われた体験学習に参加しました。始めに、大館曲げワッパ協同組合の伊藤理事長から、曲げわっぱの歴史、名称の由来、特徴、製品について資料を交えて説明がありました。曲げわっぱは、秋田県内では川連漆器、樺細工、秋田杉桶樽と並び、経済産業大臣が指定した伝統的工芸品の一つに挙げられています。また、400年前に曲げわっぱ作りが始まったと考えられていましたが、平成11年に大館市道目木字中谷地で約千年前のものとみられる曲げわっぱが、傷一つ無い完成品で見つかったというのは、歴史を感じさせる興味深いお話でした(大館



佐々木さんの作業を見つめる子どもたち

郷土博物館にて展示しています。次に、講師の佐々木さんから今回の体験学習で作成する「お盆」の作り方や注意点などの説明がありました。

本来であれば、製材の部材取りから研磨作業の商品完成までは10日から2週間程度かかる工程を2時間で行うため、お盆の底入れ・接着と研磨のみの作業でした。しかし、見た目を良くするため、桜の皮の縫い目と底板の木目が平行にならないければならないなど、注意する点があり、私も童心に帰って生徒と一緒に食い入るように、説明を聞きました。

いよいよ制作です。男女3人ずつの班に3人ずつ一緒に作ってもらいました。最初に、曲げの部分と底板の部分の縁に接着剤を付け、底板を



底板の周りに接着剤を塗ります

はめ込みました。やり易くなるよう事前にはめ込んでいたのを取り外して準備してくれていたのですが、このはめ込みが一番難しく、当て木を当てて、木づちで叩きながらはめるのが、生徒だけでなく私も大変でした。強く叩きすぎて底板が木目に沿って割れてしまったり、慎重すぎてなかなかはめられなかったりなど、作業する子の性格が出ていました。

次に、はみ出した接着剤をふき取りました。接着剤がついて汚れた布をこまめに洗いながら、ふき取ります。はたから見ると地味な作業ですが、これを怠ると商品にならないそうです。根気がいる作業でした。

最後に、出来上がったお盆の角を紙やすりで削る「面取り」作業で



子どもたちと一緒に作業する布袋屋リポーター